

Alice Hindman の無生物への愛着

Alice Hindman's Attachment for Inanimate Objects

Misaki Kitajima

北島 美咲

要 旨

Sherwood Anderson (1876-1941) は *Winesburg, Ohio* (1919) において、25 のエピソードを通して孤独に苦しむ人々を描いた。架空の町ワインズバーグに暮らす人々は、それぞれが孤独の苦しみにあがいている。その中でも、典型的な孤独の様相をみせるのが、“Adventure” の Alice Hindman である。彼女は恋人が去った後、ワインズバーグで 10 年以上彼を待ち続け、ある日、自らの状況に耐えきれなくなり、何も身につけずに雨の中を走り出すという冒険を経験する女性だ。Alice はこの冒険にいたるまでの間に、彼女なりに孤独から逃れようと工夫を凝らしている。その 1 つが “inanimate objects” 「生命のないもの・無生物」に愛着を抱くようになることだ。彼女は他人に触られるのも許せないほど家具などの無生物に執着する。今回は、この Alice の “inanimate objects” に対する愛着に注目する。本論では、Alice がかつての恋人や自らを生命のないもの、すなわち、無生物のようにとらえている様子がないかをみることで、彼女にとっての無生物がどういった意味を持つのかを検証した。Alice は無生物を変化しないもの、いわば、恒久的なものとしてとらえることで、孤独の苦しみから逃れようとしている。“inanimate objects” に注目することで、孤独の中でもがき続けるしかなくなる Alice の無力さや弱さが明らかになるだろう。

キーワード：無生物、孤独、死

はじめに

Winesburg, Ohio (1919) には孤独があふれている。ワインズバーグという架空の小さな町に暮らす人々が、自らの孤独に苦しみあがく姿を Sherwood Anderson (1876-1941) は 25 のエピソードを通して描いた。*Winesburg* に描かれる人々は、孤独をどうにか解消しようと彼らなりの行動を起こす。たとえば、“Loneliness” の Enoch Robinson は自分にとって都合の良い想像上の人物を作り上げ、満足げに部屋に閉じこもり、“Adventure” の Alice Hindman は、10 年以上耐えてきた孤独に我慢できなくなり、ある日、誰でも良いから一人でいる人を抱きしめたいといった衝動にかられて、何も身につけず雨の中を走り出すなど、さまざまな行動を起こす。特に Alice はこれに加えて、孤独な人に共通してみられる、ある工夫を凝らすようになる。たとえば、夜になると自分の部屋でひざまずき、祈りながら恋人に言いたいことをささやいたり、目的があるわけでもないのに貯金を続けたり、そして、他人に対して自分の家具などを触らせないほど “inanimate objects” 「生命のないもの・無生物」(92) に愛着を抱くようになったりするのだ¹。今回はこの Alice の無生物に対する愛着に注目しようと思う。

かつての恋人に去られ、孤独にさいなまれる Alice が、なぜ無生物への愛着を持つようになるのだろうか。Ray Lewis White が “She [Alice] becomes possessive about the very furniture in her room, forbidding anyone else to touch it, since she can have and hold tangible objects, as she surely cannot have and hold Ned” (71) と述べるように、Alice は戻って来ない、すなわち、手に入れることのできない Ned Currie の代わりに、部屋にある自分の所有物を選んだのかもしれない。確かに愛情を注ぐ別の対象を得ることが、孤独の解消になると考えることもできる。しかし、その別の対象がなぜ無生物になるのだろうか。Alice の行動をみると、彼女が 22 歳の頃は戻らない Ned を待ちながら、ほかの男性が近づいてきても相手にしようとしていないことがわかる。また、彼女が 25 歳のときに、メソジスト教会の一員である Will Hurley と知り合い一緒に散歩するようになるが、最後には彼と会うことを避けるようになってしまう。22 歳の頃の Alice はまだ若く、Ned への愛着が強いとも考えられる。だが、いずれにせよ、周囲に男性がいるにもかかわらず、誰とも関係をうまく築くことができないまま彼女は時を過ごすのだ。やはり、生きている人間では、彼女の孤独を紛らわせることはで

きないと考えるのが自然だろう。

そこでこの小論では、まず Alice の孤独が具体的にどういった状況なのか再考する。つづいて彼女の孤独への対処法として、無生物がいかなる働きをするのかを考える。そのために、Alice が Ned と彼女自身を生命のないもののようにみなす傾向がなかったかを考察し、その上で、家具やお金といった物質への愛着について考えを進める。最後に、これらのことから Alice にとって無生物への愛着とはどういった意味を持つのか、そして、その愛着が、彼女のどのような特質を示しているのかを検証しようと思う。

1. Alice の孤独

Winesburg は、世間から遮断された孤独な人々の苦悶の物語だというほぼ同一の見解が、多くの批評家によって示されている。Edwin T. Bowden は、“Sherwood Anderson’s *Winesburg, Ohio*, as a representative example of the new novel, is a collection of interrelated sketches of isolated and lonely people in a small commonplace Ohio town, but people suffering a loneliness ...” (114) と述べ、White は “[Wall is] one of Anderson’s recurring images of human anomie” (67) として、孤独を象徴する壁や、壁に囲まれて部屋が作品を通して描かれていることを指摘している²。いわば、愛情や理解を求めながらも、社会から疎外され、精神的に隠遁者となってしまった人々がさまよっているわけだ (Burbank 72)。Alice の場合も例に違わずこういった孤独のなかに生きている。たとえば、彼女は家族とともに母親の家で暮らしている。いわば家族という小さな社会に属しているのだが、母親の再婚を機にその社会の中で孤立してしまう。また、仕事を持ち、メソジスト教会の一員になるが、そういった集まりの中でも彼女が周囲の人々と打ち解ける様子はない。職場の衣料品店にいるのは雇い主である口数の少ない老人だけで、そこに描かれるのは、雨の降る大通りを見ながら、一人店で過ごす Alice の姿である。そして教会の青年団でも、薬屋の Will との出会だけで、それ以外の人々との関係は描かれない。

上にあげたように、Alice は全く一人で過ごしているわけではなく、家族や教会などに属して人と関わりながら生活をしている。だが皮肉なことに、その中にいるからこそ Alice は疎外感を強めているのだ。一番身近な家族という小さな社会の中でさえ

も、望まずとも母親の再婚を目にしなければならず、Alice は自分が一人であることを認めざるを得ない。また教会への所属や青年団への参加も、自らの孤独を意識するがゆえに Alice が決めたことなので、余計に孤独を強く感じる原因となってしまう。彼女は青年団で知り合った男性について、次のように自分に言い聞かせていることからわかる。“I want to avoid being so much alone. If I am not careful I will grow unaccustomed to being with people” (96)。Alice は孤独を解消するために、この男性と会っているし、青年団にも参加したのだ。だが、こういった手段によって、彼女の孤独が払拭された訳ではない。引用にあるように、Alice は青年団の男性を思い浮かべながら、一人でいること、すなわち、孤独であることを避けたいとさらに考えている。彼女は、自らの孤独を感じ、その孤独を解消すべく行動を起こすことで、さらに孤独であることを意識せざるを得なくなるのだ。つまり、Alice は家族もいて、自らの孤独に対処しようともしているのだが、ワインズバーグに暮らす他の人々と同様に精神的な孤立を解消することはできず、孤独の深みに陥ってしまっているのだ。

2. 孤独の苦しみから逃れる手段

(1) 無生物への関心

では Alice は孤独の苦しみを忘れることはなかったのだろうか。まったくないわけではないようだ。彼女は父親が亡くなったのを機に、Winney の衣料品店で勤めるようになった。この店での仕事について、“She was glad to be employed because the daily round of toil in the store made the time of waiting seem less long and uninteresting” (92) という記述がある。勤め始めたことで Alice はいくぶん気持ちを紛らわせることができているようだ。彼女が勤めに出たのはおそらく経済的な理由だろう。先にあげた青年団への参加のように、孤独であることを意識して人と関わろうという思いから始めたことではない。そのために、幸いなことに、孤独への意識を強めることなく、先の引用にあげたように、その苦しみをわずかでも和らげることができたのだろう。そして仕事に就いたことで彼女が始めたのが、お金を貯めるということである。Ned に会うために始めたのだが、その目的は忘れられても貯金は続けられて習慣のようになる。つまり、お金という無生物に対する関心が、ここではじめて描かれるのである。こう考えてくると、わずかながらでも経験した孤独による苦しみの軽減と、そのときに始

まったお金など無生物への関心、この2つが Alice の中で結びついていてもおかしくないだろう。そこで、ここからは Alice の無生物への関心について、さらにみていこうと思う。

(2) 人を生命のないもののようにとらえる

Alice は孤独が深まるなかで、無生物に対する愛着を持つようになる。だが最初から無生物に愛着を抱くことで、孤独を解消しようとしていたわけではない。もちろんはじめは Ned という恋人がいた。そして、彼がいなくなったことで孤独にさいなまれるようになって、その苦しさを解消するために新たな社会で人々と関わろうとしていた。それが次第に愛着の対象を家具などに向けるようになってしまう。ということは、孤独を解消するために、最初は普通に人、すなわち、命あるものに関心を持っていたのだが、次第に無生物へとその対象を変化させたわけである。しかし Alice は、孤独の直接の原因をつくった Ned をも、命あるものから無生物に変化させることで、苦しみから逃れようとしていないだろうか。なぜなら、彼女にとって Ned の存在が、徐々にあいまいなものになっているように思われるからだ。

では、Alice がどのように Ned をとらえているかをみてみよう。Ned がワインズバーグを出てから 2、3 年したとき、Alice は森に出かけて、過ぎゆく時の中で青春の美しさや新鮮さが失われてしまったことを意識しながら次のように感じている。“For the first time she felt that she had been cheated. She did not blame Ned Currie and did not know what to blame” (94)。Ned に対する愛情がまだ残っていて責める気がしない可能性もあるが、この引用にあるように、責める相手がわからないというのは、愛情の対象 Ned の存在が、Alice の中ではっきりせず、ぼんやりしたものになっていることの表れだろう。また、彼女が 27 歳の秋、薬屋の Will と歩くのが嫌になって彼を追い返したあと、部屋で孤独を感じて眠れない場面がある。そのときの Alice の思いは次のように描かれる。“... she sometimes thought of Ned Currie, she no longer depended on him. Her desire had grown vague. She did not want Ned Currie or any other man” (96)。この引用をみると、Alice は Ned の存在を意識しているが、自分の愛情を Ned に向けることも、彼からの愛情を求めることも、できないでいることがわかる。それは、彼女が Ned を一人の人間としてとらえることが難しくなっているためだろう。

これら2つの例から、AliceにとってNedは忘れられない存在だが、人間というより、個性のぼんやりとした物質のようになっていることがわかる。すなわち、AliceはNedを生命のない無生物のようにみる傾向をみせているのだ。

AliceがNedを無生物のようにとらえることに、どういった意味があるのだろうか。生きているものから、生命のないものへの変化、このことを考えるとき、Sigmund Freudの「死の本能」の概念が思い出される³。この概念は、有機物より無機物のほうが、生物よりも無生物のほうが、生よりも死のほうが、より確実なものでより恒常性のある存在であるというものだ。そして、有機物の内部は常に無機物へと解体していこうとする本性が、生物には無生物へと向かう本能、つまり「死の本能」が働いているという考えである。(小此木、『フロイト思想』66)つまり、生物から無生物への変化は、より確実なものへ変わることだ。とすると、AliceはNedをより確実な存在にしようとしたと考えられないだろうか。彼女にとって恒常的なNed、それは、ウィンズバーグで彼女と一緒にいたNedしかいない。つまり、AliceはNedを無生物化することによって、過去の彼を取り戻そうとしている可能性がある。

Aliceも最初は、今生きているNedを求めている様子が見受けられる。勤めに出てからお金を貯めたのは、もともと、彼をシカゴまで追いかけようと思っていたためだ。しかし、彼女は次第に過去のNedしか求めなくなる。思い出せるのは、彼女のそばにいたNedの姿だけなので、仕方がない部分もある。だが、そういった状況を踏まえたとしても、Aliceが、現在、もしくは、将来ではなく、過去のNedを執拗に求める様子がみられるのである。たとえば、別れの前夜にNedが言った、“Now we will have to stick to each other, whatever happens we will have to do that” (91)という言葉が彼女は何度も思い出す。AliceがNedを思うときに頭に浮かぶ言葉、それは彼女が一番幸せを感じていただろうときに聞いたものである。そして、この言葉を発したときのNedを、彼女は最も求めているのだ。また、彼女が25歳になったとき、“I am becoming old and queer. If Ned comes he will not want me. In the city where he is living men are perpetually young. There is so much going on that they do not have time to grow old” (95)などと言い聞かせ、いろんな人と付き合おうとし始める。Nedがいなくなって10年ほどたつのだが、Aliceは自らの年齢を感じているにもかかわらず、彼がいつまでも若いままでいるような感覚になっている。ここに例をあげたように、Aliceは

確かに別れた恋人を求めているが、それは、彼女が一番輝いていただろう頃の、過去の Ned の姿なのである。

これまで、Ned を生命のないあいまいなものとしてとらえることで、昔の彼を求めている Alice についてみてきたが、彼女は Ned だけでなく自らをも無生物のように考え、16 歳の頃の自分のままでいようとしていないだろうか。年月が過ぎゆくことを普段は忘れようとしているのだが、ふと思い出すときの彼女の恐れがそういった傾向を示しているように思う。たとえば、先にもあげたように Ned がいなくなって 2、3 年して森に行き、景色を見ているときに Alice は次のような感覚に襲われている。

Fear of age and ineffectuality took possession of her... something, perhaps the thought of never ceasing-life as it expresses itself in the flow of the seasons, fixed her mind on the passing years. With a shiver of dread, she realized that for her the beauty and freshness of youth had passed. (94)

何年かぶりに森で過ごした Alice は、季節が流れ自らも年齢を重ねていることをひしひしと感じる。それは、おそらく、普段は仕事もあり気持ちを紛らせて、自分が老いていくことをも忘れていたために、余計に感じてしまうことなのだろう。

また、孤独に耐えられなくなり Alice が服を脱ぎ捨て雨の中を走り出したとき、次のようなことを考えている。“... the rain would have some creative and wonderful effect on her body. Not for years had she felt so full of youth and courage” (97)。いわゆる彼女にとっての冒険を経験するとき、この引用にあるように、Alice は何年も若さや勇気といったものを感じていなかったことに気づき、まるで自分の周りの時間が止まっていたかのような感覚を覚えているのだ。

そして、この“Adventure”という作品は、Alice が Ned と別れてから、およそ 10 年間の出来事を彼女の年齢がわかるように描かれている。*Winesburg* の作品の中ではあまりないことだ⁴。たとえば、Alice が 16 歳の時に Ned と別れ、22 歳で父親が亡くなり衣料品店で働き出し、25 歳で母親が再婚して、彼女は教会の一員に、そして 27 歳で彼女の冒険を経験するといったように、Alice が年を重ねていることが印象づけられる。また、衣料品店で彼女が働く場面では“... weeks ran into months and months

into years as Alice waited and dreamed of her lover's return” (93) というような表現で、歳月が刻々と過ぎゆく様子が描かれ、さらに、ワインズバーグの移りゆく季節が “In the spring, when the rains have passed and before the long hot days of summer have come, the country about Winesburg is delightful” (93-94) と展開される。こういった止まることのない時間の描写が、Alice が 16 歳のままの自分をとどめておこうとする姿を、より対照的に映し出すのである。

これまでみてきたように、Alice は、自分が Ned と一緒にいた頃のままでであろうとしている。だからこそ、決して止まることのない時の流れを感じたときに、急に恐ろしさを感じるのだ。彼女は昔のままの Ned を求めたように、昔のままの自分を求めている。つまり、Alice は Ned だけでなく、自分をも生命のないもののように感じ、無生物のようにとらえているのだ。

(3) 家具やお金などへの関心

ここまで、Alice と無生物との関係をみてきたが、彼女が Ned、そして自分をも無生物のようにとらえていることがわかった。それは、元の自分たちの姿を求めること、すなわち変わらないものへの欲求である。Alice にとっては、それは、一番良い頃の自分たちに戻ることに。その状態に戻ることで、わずかながらでも心の安らぎを得ようとしているのだ。ときに、Ned の言葉を思い出して涙することもある。しかし、“I am his wife and shall remain his wife whether he comes back or not” (92) と言い聞かせる様子は、昔のままの Ned と結婚していることを思い浮かべ、他の青年に関心を持たなくても良いのだと、彼女が自分を納得させて安心しているようである。

Alice の恒久的なものを求める思いを、人に対する態度からみてきたが、もちろん、家具やお金といった無生物に対しても同様の思いがみられる。それは、物事の変化に対する恐れも伴って彼女のふるまいに反映される。Alice が家具などに対して、元の状態に戻そうとする様子はない。そばにいた Ned は姿を消し、自らも年齢と共に若さを失って変わっていく。しかし、家具などは自ら消えていくこともなければ、目に見えて老朽化してしまうことはないのだ。そこで、元に戻そうとは考えなくても、変わらずにそこにあり続けてほしいと強く思うことになる。

たとえば、家具に対しては、人に触れられることで、何らかの変化がおこることを

恐れているのだろう。“She ... could not bear to have anyone touch the furniture of her room” (92-93) と描かれるのは、そういった彼女の気持ちの表れだといえる。他人が触れることで、汚されたり、どこかに持ち去られたりすることが、彼女には許せない。自分や Ned に生じているような変化は、起きて欲しくないのだ。

また、お金については、当初は Ned に会いに行くために蓄えられたのだが、次第にその目的は忘れられてしまう。それでも、そのお金が彼女自身のために使われるのであればよいが、Alice はそのお金でドレスを新調する気にもなれない。おそらく、貯められたお金が減っていくことが彼女には受け入れられないのだろう。そのために、ただ貯金することが習慣のようになってしまう。また、雨の日に店番をしながら、通帳を何時間も見て過ごしている Alice の姿が描かれる。(93) この場面からは、環境や目的が変わっても、手元に残っているお金を確認して、安心している Alice の様子がかがえる。Alice にとって、お金は、恒久的にそこにあるものを得ようとする彼女の思いを満たしてくれるものなのだ。

これまでみてきたように、Alice は人に関しては元の状態に戻そうとし、家具などの物質に対しては、変わらずにそのままにあることを求めた。いずれにせよ、彼女は永久に変わらずに存在するものを求めることで、わずかでも孤独を解消しようとしたのだ。永久に変化することなく存在するもの、それは、彼女にとっては、生命のない、無生物のようなものだったのである。

結 び

Alice にとっての無生物を考える上で、去っていった恋人の Ned や自らを生命のない無生物のようにとらえていることをみてきた。そこには、孤独の苦しさを解消するために、求める対象を、彼女にとって一番心地良さを感じられた元の状態に戻そうとする気持ちが隠れている。そして、それは、いつまでも変わらずそこにあるもの、お金や家具といった物質を求めることにつながる。つまり、Alice が無生物に愛着を抱くということは、彼女にとって恒久的なものに執着することである。そうすることで、孤独から逃れようとしたのだ。

Winesburg には Alice の他にも、無生物とのかかわりを描かれる登場人物がいる。George Willard の母親 Elizabeth Willard はその一人だ。彼女は “Mother” で、

“Although for years she had hated her husband, her hatred had always before been a quite impersonal thing. He had been merely a part of something else that she hated” (23) とあるように夫の Tom を人格のある存在としてみることができない。また、客に見られないようにホテルの中を動き回る Elizabeth の様子は、自分の存在を消そうとしているかのようだ。その上、Tom にとっては、彼女は幽霊のような存在になってしまっているのだ。

もう一人の良い例は、“Loneliness”の Enoch Robinson だ。彼は、生きた人間との関わりをやめて、生活感のない部屋で想像上の人物とだけ親密な関係をもとうとする。Enoch が作り上げたのは、今までに会ったことのある友人らの良いところだけを取り出した、彼にとって都合の良い人物たちである。また、Enoch は結婚しても、妻と子との生活を長く続けることができない。あくまでも彼にとっては、結婚生活もゲームであり、そこにいる人々はゲームの駒のようにしかみることができないのだ。Enoch のこういった様子もまた、生きている人間を、命のない存在のようにみている例だといえるだろう。このように、Alice、Elizabeth、Enoch といった *Winesburg* における典型的な孤独を抱える人物たちは、無生物との関わりをそれぞれに描かれている。やはり、孤独と無生物を切り離して考えることは難しいだろう。

ただ、ここにあげた登場人物が、孤独の苦しみを解消できているわけではない。Elizabeth は、なすすべもなく孤独を抱いたまま死を迎え、Enoch はワインズバーグの町に戻り “I’m alone, all alone here, . . . It was warm and friendly in my room but now I’m all alone” (155) と泣き言をいうことしかできない。Alice も例に違ふことなく、無生物に愛着を抱くことで一瞬の安らぎを得ても、孤独から逃れられることはない。彼女は、いつまでも変わらないものを求めるのだが、そういったものを簡単に得ることはできない。Ned も Alice 自身も年齢を重ねているのだから、当然 10 代の頃のままではいられないわけではない。このことを、Alice が全く気づいていないわけではない。先にあげた、森で流れゆく季節を感じたり、“Adventure” の最後で “. . . many people must live and die alone, even in Winesburg” (98) という事実に直面しようとしたりする場面は、時の流れには逆らえないことを Alice が認めざるを得ないことをうかがわせる⁵。孤独の苦しみの中であがきながら、彼女は自分の求めるものに無理があることを、うすうす感づいているのである。

これまでみてきたように、“Adventure”で描かれる無生物への執着は、孤独から逃れるために、恒久的なものを求めようとするあがきの表れである。しかし、求めていることと現実の間に矛盾があるために、Alice はどこまでいっても、その孤独の中にどっぷりつかっていることしかできない。つまり、“Adventure”における“inanimate objects”は、逃れられない孤独と向き合ってあがく、わずかながらの Alice の強さと、皮肉なことにそのあがきによって、さらに孤独の深みにとらわれてしまう彼女の無力さの象徴といえるだろう。

注

- 1 引用は Sherwood Anderson. *Sherwood Anderson's Winesburg, Ohio with Variant Readings and Annotations*. (Athens: Ohio UP, 1997) を用いた。
- 2 その他に代表的な批評家として、Irving Howe や Malcolm Cowley らがいる。
- 3 Freud が 1920 年に刊行された『快感原則の彼岸』ではじめて死の本能について、次のように論じている。

すべての生命体が〈内的な〉理由から死ぬ、すなわち無機的な状態に帰還するということが、例外のない法則として認められると仮定しよう。すると、すべての生命体の目標は死であると述べることができる。これは、生命のないものが、生命のあるもの以前に存在していたとも表現することができる。

(『自我論集』162 傍点は原文の隔字体)

- 4 White が “… the fictional town is laid out with considerable geographical and sociological detail and that it is set in a chronology that in its internal consistency creates no serious problems” (34) と述べるように、*Winesburg* 全体を通して一貫性がないということではない。しかし、“Just as Anderson never provides in one place a full description of his imagined town, he nowhere provides a specific date in either the nineteenth or the twentieth century when the stories ‘happened’” (31) と述べるように、舞台となった場所も年代も具体的な記載はなく、出来事がおきた順番にも並べられていない。いずれにせよ、*Winesburg* で登場人物の年齢が、“Adventure”の Alice のように出来事とともに順を追って描かれることはあまりない。
- 5 White は “Adventure” の最後の文章から “… the grotesque people of Winesburg,

Ohio, are doomed to live and die alone. . . . all the world's people are doomed to live and to die alone, no matter how well they delude themselves with fantasies of closeness and intimate love” (73) と結論づけられると述べている。Bowden も同様のことを述べながら、Elizabeth の孤独と死について “Her only final solution was death, the last escape from life” とし、続けて “Death would seem the only really complete escape from life, but death is too final an answer. In the problem of isolation it, too is simply a fact” (122) と述べる。加えて “. . . in this lonely life there are no final answers, there are no final truths about the isolated heart” (123) と述べる。Bowden が述べるように、孤独の解決として死を求める人物が描かれるが、だからといって、すべて死で解決するというのではないだろう。“Adventure” の最後で Alice は死という解決法を垣間見て安堵したのではなく、孤独もまた死と同様、どうあがいても逃げられないものだと感じたのだといえる。

参考・引用文献

- Anderson, Sherwood. *Sherwood Anderson's Winesburg, Ohio with Variant Reading and Annotations*. Ed. Ray Lewis White. Athens: Ohio UP, 1997.
- Bowden, Edwin T. *The Dungeon of the Heart: Human Isolation and the American Novel*. New York: Macmillan, 1961.
- Burbank, Rex. *Sherwood Anderson*. New York: Twayne, 1964.
- Cowley, Malcolm. Introduction. *Winesburg, Ohio*. By Sherwood Anderson. Ed. Malcolm Cowley. New York: Viking, 1960. 1-15.
- Freud, Sigmund. *Beyond the Pleasure Principle, Group Psychology and Other Works*. Trans. James Strachey. The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud 18. London: Hogarth, 1955.
- Fussell, Edwin. “*Winesburg, Ohio: Art and Isolation*.” *Modern Fiction Studies* 6 (1960): 106-14.
- Howe, Irving. *Sherwood Anderson*. London: Methuen, 1951.
- Mellard, James M. “Narrative Forms in *Winesburg, Ohio*” *PMLA* 83 (1968): 1304-12.
- Small, Judy Jo. *A Reader's Guide to the Short Stories of Sherwood Anderson*. New York. G.K.

- Hall, 1994.
- Stouck, David. "Winesburg, Ohio As a Dance of Death." *American Literature* 48 (1977): 525-42.
- Updike, John. "Twisted Apples." *Harper's Magazine* 268 (1984): 95-97.
- White, Ray Lewis. "Winesburg, Ohio": *An Exploration*. Boston: Twayne, 1990.
- Winther, S. K. "The Aura of Loneliness in Sherwood Anderson." *Modern Fiction Studies* 5 (1959): 145-52.
- Wright, Austin McGiffert. *The American Short Story in the Twenties*. Chicago: U of Chicago P, 1961.
- 小此木啓吾『フロイト思想のキーワード』東京：講談社現代新書、2002.
- 編『フロイト精神分析入門』東京：有斐閣、1977.
- フロイト、ジークムント『自我論集』竹田青嗣 編 中山元 訳、東京：筑摩書房、1996.
- 『精神分析入門』(上)(下) 高橋義孝、下坂幸三 訳、東京：新潮社、1999.

